

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02323

研究課題名（和文）女子高等教育のトランスナショナルな交流とネットワーク構築に関する歴史的研究

研究課題名（英文）Historical Study on the Transnational Connection and Networking of Women Academics

研究代表者

香川 せつ子 (Kagawa, Setsuko)

津田塾大学・言語文化研究所・研究員

研究者番号：00185711

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では主として20世紀初頭における女子高等教育の国際的な交流とネットワーク形成を、日本の女性や女子教育指導者の留学実態の分析を通して検討した。男性の海外派遣が国家的事業として推進されたのに対し、女性の留学は女子教育の強化が国力増強と結びつけられた1890年代に本格化した。前後してミッション・スクールや民間の支援による留学が進捗し20世紀前半に増加した。全体的動向（女性留学者の量的推移や留学先、専門分野）を把握するとともに、個別事例をとりあげ、留学の動機と目的、留学による学業的成果と意識の変容、帰国後のキャリアと活動を分析し、留学を通して形成された女性たちの国際ネットワークを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一に高等教育の歴史をジェンダーとトランスナショナルな視点と方法で考察したことである。従来の教育史研究は一国単位の教育制度史や思想史が主であったのに対し、本研究では西洋と日本との交流と接続、学生や教師の国境を超える移動に焦点を合わせて考察した。

第二は、女子留學生の実態と歴史的役割を検討する本格的な研究という点である。男性の留学に関する研究は多数蓄積されているが、マイノリティである女性の留学は部分的にしか明らかにされてこなかった。

第三は、国際学会での発表や外国学術雑誌への投稿を通して、研究成果を海外へと発信し、トランスナショナルな研究交流を進めたことである。

研究成果の概要（英文）：This study explores transnational exchange of women's higher education and the formation of women's networks in the early twentieth century, focusing on Japanese women who studied abroad in the U.S. and Britain. In contrast to fruitful research results on male overseas students, female studies abroad have not been examined enough. Analyzing overall trends of Japanese overseas students from the gender perspective, it highlights the difference in their numbers, objectives and career status after returning to Japan. In addition, it investigated the lives of several women about their experiences in Western societies, which affected the transformation of their educational thoughts and practices after returning home. When women were excluded from Japanese universities, women who could study abroad played an important role not only in education but also in society to enhance the social status of Japanese women and to connect Japanese women with international women's activism.

研究分野：教育学

キーワード：女子教育 トランスナショナル 教育史 留学生 ネットワーク 高等教育 国際交流 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

グローバル化する世界のなかで大学の国際化が重要課題となって久しい。他方、欧米に発するグローバル・ヒストリー、トランスナショナル・ヒストリーの学問潮流は、日本の教育史研究の視点や方法にも変革を迫っている。とりわけトランスナショナルという視座は個人や団体のボランティアな国際移動や連携に着目することで、教育史の表舞台に登場してこなかった女性の国境を越えた移動を可視化する。研究代表者はこれまで主としてイギリスの女性高等教育史を研究する過程で、欧米大学間における学生や大学人の移動と連携を検討し、国際的な動向が日本の女子高等教育にも及んでいることに着目した。こうした問題関心から、明治以降の日本の女性の海外留学の歴史を俯瞰するとともに、留学を通して築かれた女性高等教育のネットワークについて考察したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は高等教育の国際的な展開を、トランスナショナルとジェンダーという視点から考察することである。とくに欧米女子教育と日本の女子教育の双方向的な関係を探るための手がかりとして、日本の女性と女子教育指導者の留学に焦点を当て、その実態を分析することを共同研究の目標に設定した。幕末明治期以降の留学史に関する先行研究には一定の蓄積があるが、戦前期における留学者の大半が男性であることから、女性に関する記述は極めて少ない。女性の留学に関しては、津田梅子研究を筆頭とする事例研究や、神戸女学院や日本女子大学校等の個別の学校に特化した研究はあるものの、留学の実態を総合的に把握することはできていない。本研究はこうした先行研究の隙間を埋めるとともに、留学というトランスナショナルな経験が個人に与えた影響や、それを通して築かれた人的ネットワークを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の検討

第一に、近代以降の日本の留学に関する先行研究（石附実『近代日本の海外留学史』、富田仁編集『海を越えた日本人名辞典』辻直人『近代日本海外留学の目的変容 文部省留學生の派遣実態について』等）は留学の歴史的推移を質量両面から把握するうえで有益である。その記載から女性を抽出し、性別にみた留学時期や目的の相違を検討した。

第二に、津田梅子、安井てつ等著名な女子留學生に関する伝記や自伝、評伝、および女子高等師範学校や神戸女学院、日本女子大学校、桜美林大学等、欧米の大学に卒業生や教師を留学させた実績のある学校の記念誌や研究があり、女性留学者の個別の事情とその背景を伝える。

第三に、20世紀初頭に展開された国際的な女性の社会活動をトランスナショナルな視点で検討した英語圏の研究である。Rumi Yasutake, *Transnational Women's Activism: The United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California 1859-1920*のように、日本の女性のトランスナショナルな社会的活動に関する研究も多く発表されている。

本研究では、これらの先行研究に学びつつ、女子教育と女性教師のトランスナショナルな移動（多くは留学の形態をとる）に着目し、教育史における新しい地平の開拓に挑んだ。

(2) 全体的動向の把握

上記の先行研究や学校史を基に、1870年代から1920年代に教育研究を目的に海外渡航した女性を抽出して年代別に整理し、派遣機関（文部省、学校、私費による自主渡航等）留学前の学歴と職歴、専攻分野、留学先機関、留学後の職歴を検討した（佐々木啓子「戦前期女子留学者の渡航目的および派遣機関の動向について 高等教育機会と専門職位の獲得を求めて」『電気通信大学紀要』32巻第1号2020年、pp.1-13）

(3) 個別事例の検討

女性の留学は、国家による女子教育振興政策を背景に1890年代から本格化し、帰国後に女子教育指導者として影響力を発揮し、自ら学校設立に着手する女性を輩出した。彼女たちの人生と職業上のキャリアにおいて、海外留学での西洋文化との出会い、トランスナショナルな経験はどのような意味をもったのか。個別の事例をとりあげて、留学動機と目的、留学による学業的成果と意識の変容、帰国後の活動、留学前後の人的ネットワーク等を掘り下げて検討した。

(4) 国際学会での報告、海外研究者の招聘と交流

トランスナショナルな教育史の視点と方法の導入にあたっては、海外の文献に学ぶのみならず、海外研究者との交流にも力点を置いた。イギリスにおけるトランスナショナルな女子教育史の第一人者 Joyce Goodman（ウィンチェスター大学教授）を海外研究協力者として依頼し、2019年8月に学習院大学で開催された世界教育学会大会（WERA）でのシンポジウムに同教授を招聘し、津田塾大学でも公開講演会を開催した。同時に、研究成果の海外への発信にも力を入れて、国際教育史学会（ISCHE）イギリス教育史学会（HES）国際学会での報告を積極的に行った。

4. 研究成果

(1) 女性の留学の全体像

戦前期の女子留学を官費と私費に分類して量的な面からみると、官費による留学生の数は把握しやすい。1871年に岩倉具視使節団に同行してアメリカに派遣された津田梅子、山川捨松、永井繁子等5人の少女は北海道開拓使による派遣であった。文部省が留学生派遣を開始する1875年から1940年までに海外に派遣した留学生は3180人に上るが、そのうち女性は25人(0.8%)に過ぎなかった(辻、2010)。男女の差異は数のみでなく、派遣の目的にも顕著である。男子留学生の多くが政治、経済、工学、理学等の学術分野での知識技術の習得であったのに対して、女子のそれは家庭婦人となるために必要なマナーや保育、音楽等の技芸、さらには良妻賢母教育を目的とする家政学、体育が中心であった。

津田梅子等5人の留学生の派遣以後の1890年代末まで、官費による留学はほぼ途絶えており、音楽(幸田延)保育(加藤錦子)らの派遣があったのみである。その間隙を埋めるように、私費で看護や医学(岡見京子、高橋瑞子)を学ぶため欧米に自主渡航した女性もいた。

女性の海外留学が本格化するのは1890年前後であるが、その先鞭を切ったのはミッション・スクールである。なかでも神戸女学院は卒業生が帰国後にキリスト教布教にかかわることを期待して、甲賀ふじ(幼児教育)や井深花(理科、数学)等を皮切りに、卒業生をアメリカ留学させた。同校は、1910年代から1930年代までに27人の卒業生をアメリカの大学に送り出した(『神戸女学院百年史』1981)。他方で、文部省は1890年代後半から安井てつ、井口あぐり、宮川スミなど女子高等師範学校教員を、教育学、家政学、体育等の教育法の習得を目的に英米に官費で留学させた。背景には日清戦争以後の国力増強を目的とする女子教育振興政策がある。

1900年代になると女子英学塾や日本女子大学など、日本人が設立した女子高等教育機関が、後継者養成のために卒業生を海外に送り出した。日本女子大学は1908年から1923年までに14人の卒業生をアメリカに留学させ、そのうち井上秀(家政学)、上代タノ(英文学)は帰国後母校で教鞭を執り学長となった(島田法子、2010)。他方、津田梅子の留学先であるプリンマー大学関係者等の支援によって1899年に設立された「日本女性のための米国奨学金」により、1895年から松田道、河井道や星野あい等が留学し、帰国後日本の女子教育界でリーダーシップを発揮した(内田道子、2000)。プリンマー大学やウェルズリー大学等アメリカの女子大学と日本の女子教育高等機関との連携がこの時期に築かれた。共学のオーバーリン大学でも戦前期に19名の女子留学生を受け入れたとされる(樽松かほる他、2004)。こうして留学を通じた学生と教師の国境を越えたネットワークが形成されていったのである。

また1920年代前後の新たな傾向として、自然科学分野での先端的な学問研究を志す女性の留学が始まり、その端緒は1914年に官費でアメリカ大学に派遣され、帰国後東京帝国大学から理学博士学位を授与された保井コノである。さらに東北帝国大学で理学士号を取得した黒田チカ、丹下ウメは英米の大学に留学し、女性科学者のパイオニアとして顕著な業績を残した。

以上のように、戦前期に海外留学をした女性たちの多くは帰国後に教育・学術でのパイオニアとなり、戦後に女子高等教育機関が女子大学に昇格された後も女性大学教員のロールモデルとなった。それと同時に、彼女たちの多くは、戦前戦後を通して様々な分野で女性の地位向上に貢献した。YWCA日本総幹事として活躍した河井道、東京YWCAの初代会長となる津田梅子、WULPH(婦人国際平和自由連盟)の日本支部を設立した上代タノ、大学女性協会初代会長の藤田たきに代表されるように、留学を通して得た米英の女性指導者との出会いや女性団体との接触を通して、国際的な女性運動に参画した。

(2) 個別事例研究

大江スミ 家政学

大江スミ(旧姓宮川)(1875-1948)は、20世紀前半の日本の女子教育における家事科・家政学教育の推進者の一人である。東洋英和女学校(1889~94)と女子高等師範学校(1897~1901)で教育を受けた後、沖縄師範学校と沖縄高等女学校に奉職した(1901~1902)。

1902年夏に文部省の官費留学生に選抜され、日本の女子高等学校の家事科教員の育成を充実させるためにイギリスで家事科教育を学んだ。1902~05年は官費留学生として主にバタシー・ポリテクニク(Battersea Polytechnic)で家事科教育を学び、1905~06年は私費留学生としてベッドフォード・カレッジ、ロンドン(Bedford College, London)にて衛生と寮生活について学んだ。帰国後、東京女子高等師範学校の家事科教授(1906~25)として勤め、日本における家事科教育や教員養成の発展に貢献した。退職後の1925年に女子高等教育機関である東京家政学院を創立し、大江が理想とする教養と専門性、理論と実践を両立した包括的な家政学教育を実現した。大江は家政学を「経世の学問」と定義し、近代国民国家の基盤となる近代的な家庭の形成と、それを支える近代的な科学的主婦を育成することを目指した。(中込さやか)

河井道 歴史・経済学

河井道(1877-1953)は伊勢神宮の神官の家に生まれたが、明治維新後の改革で父は職を失い、一家は北海道へ移住した。道は1887年、札幌で長老派の婦人宣教師が設立したスミス女学校(後に北星女学校)に入学した。同校に隣接する札幌農学校から新渡戸稲造らが北星女学校で教鞭をとっていた。新渡戸は河井道の才能を見出しプリンマー大学への留学を強く勧め、道は「日本女性のための米国奨学金」によって同大に入学し経済学を専攻しBA(学士)の資格を取得した。1904年にアメリカ留学から帰国して女子英学塾の教師となるとともに日本YWCA(キリスト教女子

青年会)の設立に奔走した。1912年にYWCA日本総幹事となって以降、1910年代にはYWCAでの国際的な活動を展開していった。アジアでは台湾、朝鮮、中国で活動をして、ウラジオストック、シベリア、クリブランド、ジュネーヴの大会に出席した。1920年代に入ると、河井道は女学校の創設に精力を傾け、1929年に恵泉女学園を創設した。本研究では恵泉女学園史料室にて河井道の文書、留学時の史料などを閲覧して分析をした。また、本研究で開催された公開講演会および研究会では、Joyce Goodman氏から河井道についての研究方法などについて有益な示唆をうけることができた。(佐々木啓子)

二階堂トクヨ 体育

二階堂トクヨ(1880-1941)は、日本の女子体育のパイオニアであり、女子高等師範学校卒業後に金沢や高知で教鞭を執ったのちに、1911年女子高等師範学校助教授に就任した。アメリカのボストン体操学校でスウェーデン体操を学んだ井口あぐりの後任として、同校の体育指導者となる。1913年から1914年までイギリスに留学。マルティナ・オスターバークが1885年に設立した女性体育教員養成カレッジで学んだ。二階堂の留学体験は、著書『足掛け四年英国の女学界』に素描されている。二階堂は、訓練に傾斜した日本の体育指導とは異なり、オスターバークの学校では、教養科目、生理学や衛生学、スポーツとスウェーデン体操とを調和させた幅広いカリキュラムが実施されていることを知り感銘を受けた。当時オスターバークの体育指導法は、イギリスの女子中等学校や女子高等教育機関で広く普及していた。イギリスから帰国後の1915年、二階堂は女子高等師範学校教授に着任。東京女子大学の非常勤講師も務めた。1921年に雑誌『わがちから』を創刊、1922年に二階堂体操塾(現日本女子体育大学)を創立し、オスターバークの教員養成カレッジに模した女子体育の実現をめざした。本研究では、日本女子体育大学図書館、日本体育大学図書館で閲覧・収集した一次資料、二次資料、およびマルティナ・オスターバークとイギリス女子身体教育に関する英文資料を参照して考察を進めた。(香川せつ子)

上代タノ 英米文学

上代タノ(1886-1982)は戦後の日本女子大学の第6代学長(1956-65)であり、長年、国際的な女性平和団体である婦人国際平和自由連盟(WILPF)日本支部のトップを務めた人物である。現在の研究では、上代の戦後の女性リーダーとしての活躍に注目が集まる中、本研究ではこの人物のキャリアが戦前における2度の留学経験に由来することに着目し、その意義を追求した。上代は日本女子大学英文学部の出身で、自校を盛り立てる将来の英文学部の教員として上代は恩師である新渡戸稲造と校長である成瀬仁蔵らの支援を得て、1912年~1917年にアメリカのウェルズ・カレッジ(Wells College)と1924年~1927年のアメリカとヨーロッパでの留学を果たした。本研究ではこれらの留学のプロセスについて上代と恩師らの間で交わした私的書簡(日本女子大学成瀬記念館所蔵)や日本女子大学の機関紙『家庭週報』(日本女子大学図書館所蔵)を中心に明らかにしたところ、上代は英米文学を通じて海外文化を深く学びながら、恩師らの意志である世界大戦に対する「国際協調」の意志を受け継ぎ、女性の国際平和団体(WILPH)で活躍する人物へと成長する姿を見出すことができた。すなわち彼女の留学は、たんに日本への英米文学をもたらしただけでなく、国際関係をリードする新しい女性像を戦前の日本にもたらしたことであったことがわかった。本研究では彼女の留学経験こそ、戦後の新たな女性リーダーの礎として、欠かすことのできない教育歴であったことを強調した。(内山由理)

高良とみ 心理学

高良とみ(1896-1993)は日本女子大学出身の心理学者であり、戦後日本で最初の女性参議院議員となった。本研究では、高良の戦後の政治活動のベースとなったトランスナショナルな平和思想の形成のプロセスを明らかにするために、高良の戦前期におけるアメリカ留学とヨーロッパ巡回旅行と帰国後の活躍に注目した。高良自身の残した様々なメモや日記、書簡(高良とみ/青木生子(編)『高良とみの生と著作』第1巻~第3巻ドメス出版2002年)を基に、新しい自己の発見に至るプロセスを明らかにした。高良は日本女子大学の英文学部を卒業したのち、1918年~1922年にアメリカのコロンビア大学とジョン・ホプキンス大学に留学し、心理学博士を取得した。留学中の高良は恩師である成瀬仁蔵や麻生正蔵の導きで第一世界大戦後の国際協調に強く共鳴し、積極的にヨーロッパを訪問して戦後の荒廃を日本に伝え、婦人国際平和自由連盟(WILPF)日本支部の代表として国際大会に参加した。帰国後は九州大学や日本女子大学で心理学の教鞭をとる傍ら、高良は留学中に会ったノーベル平和賞受賞者のアメリカのジェーン・アダムズや、インド独立運動をリーダーのガンジー、インドの詩人タゴール、中国の魯迅と親交を深めた。高良の事例からは、留学は女性心理学博士という新しい女性像を日本にもたらしただけでなく、様々な国の人物との関わりを通じてトランスナショナルな平和思想を追求する新しい女性像を日本にもたらしたことが分かった。本研究は、留学を通じた高良の自己変容が、やがて戦後の平和国家を目指した日本の女性政治家としての思想形成へと通じることを示唆した。(内山由理)

黒田チカ 自然科学

黒田チカ(1884-1961)は女子高等師範学校を卒業後、研究科に進学、1909年女子高等師範学校助教授に任ぜられた。1913年に東北帝国大学が女性に門を開き、牧田らく、丹下ウメとともに

に入学、1916年女性で最初の理学士となった。東北帝国大学を卒業後、女子高等師範学校に教授として着任し、1921年より2年間、有機化学の世界的権威であるオックスフォード大学のヘンリー・パーキン博士のもとで研究に従事した。パーキン博士のダイソン・ペリンズ研究所では国籍や性別を問わず多くの研究者を受け入れており、黒田は恵まれた環境のもとで紅花の色素カーサミンの研究を進めパーキンとの共著論文を学会誌に発表した。1923年の帰国後、女子高等師範学校で教鞭を執るとともに、理化学研究所の嘱託研究員となってカーサミン研究を継続し、1929年に東北帝国大学から博士学位を授与された。黒田はカーサミンのほかに、ウニやツユクサなど天然生物の色素研究に尽力し、玉葱から血圧降下剤を発明して特許を取得したことで有名である。東京女子高等師範学校が1949年にお茶の水女子大学に昇格したことに伴い、女性最初の大学教授となり後進の育成に尽力した。婦人科学者協会初代会長として女性科学者のネットワーク構築にも貢献した。本研究では、お茶の水女子大学および留学先であるオックスフォード大学図書館で文献調査を行い、黒田の家庭環境、東北帝国大学入学関連資料、ヘンリー・パーキンとダイソン・ペリンズ研究所関連資料を閲覧した。(香川せつ子)

(3) 研究成果のまとめ

本研究では女子高等教育のトランスナショナルな移動と交流に関する歴史研究の端緒として、明治から戦前までの女子留学生に着目して検討した。同時期の留学に関する先行研究をもとに、ジェンダーの視点を導入した分析をすることで、男女の数や留学目的、留学時期の差異が明確となった。その差異は国家による派遣において顕著であり、官費で留学した女性の数は男性の1%にも満たない。男性が政治、経済、産業分野の科学的知識と技術の導入を目的としたのに対し、女性の場合は西洋流家庭婦人の育成や良妻賢母教育を牽引する女性教師の派遣が主であった。

官費によらない留学では、医学や看護、衛生、保育分野での知識技術と資格の取得を目的に職業的自立を視野に入れた女性の留学が目立つ。1890年代以降、女子の留学を推進した原動力は、ミッション・スクールと私立女子高等教育機関であり、アメリカへの留学が圧倒的多数であった。20世紀に入ると卒業生の留学を通じた日本の女子高等教育機関とアメリカの大学との連携が進み、卒業生や教員のネットワークが形成されていった。日本での大学教育の機会が閉ざされていた戦前期にアメリカの大学で学ぶことができた女性は、社会的経済的に恵まれた階層に属する一部のエリート女性であったことは否定しがたい。しかしその多くが、戦中戦後を通して女子高等教育や女性の社会的国際的活動のリーダーとなり、女性の地位向上やエンパワーメントに貢献したことは看過できない事実である。

本研究では戦前の女子留学の変遷を俯瞰することを目的に、個人の評伝や学校史などの二次資料、さらには海外も含めて、関係する大学や教育機関のアーカイブ調査で得た一次資料を基に、マクロとミクロの双方の視点から実態の把握に努めた。しかし、いまだ未発見の事実や資料が多数存在するであろうことは想像に難くない。個人や団体の国際的ネットワークについても内的構造や特徴を十分には把握できなかった。これらの欠落部分を埋めるとともに、欧米とアジア圏を含めたより広い視野のもとで、日本を中心とする女子高等教育のトランスナショナルな交流やネットワークについて考察することが今後の課題である。

引用参考文献：

- 石附実『近代日本の海外留学史』、ミネルヴァ書房、1976年。
- 富田仁編集『海を越えた日本人辞典』日外アソシエーツ、1985年。
- 辻直人『近代日本海外留学の目的変容 文部省留学生の派遣実態について』東信堂、2010年。
- 神戸女学院『神戸女学院百年史 総説』1976年。
- 島田法子「日本女子大学創設とアメリカ：成瀬仁蔵と教え子たちのアメリカ留学を中心に」『日本女子大学英米文学研究』45、2010年、61-78頁。
- 内田道子「メアリ・モリス奨学金」飯野正子、亀田帛子、高橋裕子編『津田梅子を支えた人びと』有斐閣、2000年、178-201頁。
- 樽松かほる、堤稔子、高橋静江「戦前オーバリン大学に留学した日本人女性のライフヒストリーに関する比較研究--オーバリン大学アーカイブズの資料を手がかりとして」『桜美林論集』31、2004年、75-91頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 香川せつ子	4. 巻 25
2. 論文標題 イギリス身体教育の日本への伝播—下田歌子と安井てつの視察・留学を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日英教育研究フォーラム	6. 最初と最後の頁 51～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19021/juef.2020.24_017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 香川 せつ子	4. 巻 8
2. 論文標題 下田歌子と津田梅子 女子教育のトランスナショナルな連鎖	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所 年報 = The Annual Bulletin of the Shimoda Utako Research Institute for Woman	6. 最初と最後の頁 15～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002272	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Keiko Sasaki	4. 巻 50-4
2. 論文標題 The formation of Japanese women's adult education after the Second World War: a case study of the learning activities of Chofu City	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 History of Education	6. 最初と最後の頁 567～585
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0046760X.2021.1906956	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中込さやか	4. 巻 1018
2. 論文標題 ミドルクラスの「女性らしさ」と女子教育：ノース・ロンドン・コリッジト・スクールと家庭科関連科目群 1871～1894年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 香川せつ子	4. 巻 24
2. 論文標題 フェミニスト・ヒストリーからジェンダー、トランスナショナル・ヒストリーへ イギリス女性教育史研究の半世紀	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日英教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19021/juef.2020.24_017	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 香川せつ子	4. 巻 18
2. 論文標題 ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダー—周縁化された女性たちの戦略	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	6. 最初と最後の頁 161-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ジョイス・グッドマン著 香川せつ子・中込さやか・内山由理共訳	4. 巻 35
2. 論文標題 プリンマー・カレッジの日本式教室にみる地方的、国家的、トランスナショナルな流れ： 空間・時間・物質 と女性教育のトランスナショナルな流れ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 津田塾大学言語文化研究所所報	6. 最初と最後の頁 84-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sasaki Keiko, Uchiyama Yuri, Nakagomi Sayaka	4. 巻 7-2
2. 論文標題 Study Abroad and the Transnational Experience of Japanese Women from 1860s-1920s: Four Stages of Female Study Abroad, Sumi Miyakawa and Tano Jodai	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Espacio, Tiempo y Educacion	6. 最初と最後の頁 5-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14516/ete.322	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木啓子	4. 巻 33-1
2. 論文標題 女性医師のバイオニア、岡見京と吉岡彌生 海外留学による医師資格取得と、機関養成としての女医学校設立	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 電気通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 26-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18952/00009823	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木啓子	4. 巻 13
2. 論文標題 明治期における女子留学の実態と国際交流 : 津田梅子・河井道と新渡戸稲造のネットワークを中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木啓子	4. 巻 32-1
2. 論文標題 戦前期女子留学者の渡航目的および派遣機関の動向について: 高等教育機会と専門職位の獲得を求めて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 電気通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18952/00009424	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Keiko Sasaki	4. 巻 48-2
2. 論文標題 'The History of The Ohin-kai'-The alumni of the Tokyo Higher Normal School for Women: a milestone in Japan's education for women	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 History of Education	6. 最初と最後の頁 233-253
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/0046760x.2018.1545934	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計29件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 24件）

1. 発表者名 Setsuko Kagawa
2. 発表標題 Writings by Utako Shimoda, as Travelling Objects of Women's Education between Japan, Britain, and Asia
3. 学会等名 ISCHE 43 (Online)International Standing Conference for the History of Education (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Setsuko Kagawa
2. 発表標題 Modernizing the status of Japanese Women for the nation: Utako Shimoda(1854-1938) and her inspection tour to Britain and Europe 1893-1895
3. 学会等名 History of Education Society, UK (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Keiko Sasaki
2. 発表標題 Transformation of Street Kamishibai (Paper Theatre) to Educational Tool in 1930s Japan: The Practice of Miss Yone Imai
3. 学会等名 ISCHE 43 (Online)International Standing Conference for the History of Education (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sayaka Nakagomi
2. 発表標題 Sumi Oe 's transnational experience in UK and Europe: Seeing educational writings as traveling objects 1902-1906 (A6 ONLINE 02.1: Educational Writings as Travelling Objects between the West and the East).
3. 学会等名 ISCHE 43 (Online) International Standing Conference for the History of Education (国際学会)
4. 発表年 2022年

1 . 発表者名 Setsuko Kagawa
2 . 発表標題 The Birth of Female Scientists in Japan: Chika Kuroda and the Transnational Networks of Male Scientists in the Early Twentieth Century
3 . 学会等名 Hidden Histories: Women and Science in the Twentieth Century (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Setsuko Kagawa
2 . 発表標題 From Sweden to Japan: Tokuyo Nikaido(1880-1941) and Martina Osterberg's Training College for Physical Education
3 . 学会等名 International Standing Conference for the History of Education (ISCHE 42) (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Keiko Sasaki
2 . 発表標題 The Female presidents of Women's Colleges: Changed the Social Structure of Japan
3 . 学会等名 International Standing Conference for the History of Education (ISCHE 42) (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Keiko Sasaki
2 . 発表標題 Memories of Bryn Mawr College days and the philanthropist society: A case study of three female presidents of women ' s colleges in Japan
3 . 学会等名 History of Education Society 53th Annual Conference (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1. 発表者名 Sayaka Nakagomi
2. 発表標題 Sumi Oe's Transnational Experience and the 'Social' Role of Modern Japanese Women c.1902-1911
3. 学会等名 International Standing Conference for the History of Education (ISCHE 42) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 香川せつ子
2. 発表標題 19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリス女子身体教育と日本への伝播
3. 学会等名 日英教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木啓子
2. 発表標題 戦前期女子海外留学・派遣の実態調査にみる女性リーダーたちの トランスナショナルな経験
3. 学会等名 ジェンダー史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中込さやか
2. 発表標題 イギリスと日本における教育のトランスナショナルな伝播 大江スミ(1875-1948)と家事科/家政学の事例から
3. 学会等名 西洋史学会
4. 発表年 2020年

1 . 発表者名 Setsuko Kagawa
2 . 発表標題 Transnational and Gender: New Research Trends in the History of Japanese Education
3 . 学会等名 World Education Research Association 2019 Focal Meeting (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Keiko Sasaki
2 . 発表標題 The Expansion of the Western Space in Japan(1859-) : Culture, Community, Class, and Gender in Girls ' Mission Schools in Foreign Settlements and Japanese Cities.
3 . 学会等名 International Standing Conference for the History of Education 41th Conference (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Sayaka Nakagomi
2 . 発表標題 The British Impact on Women's Education in Japan: A case study of Sumi Oe and Tokyo Kasei Gakuin
3 . 学会等名 World Education Research Association 2019 Focal Meeting (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Sayaka Nakagomi
2 . 発表標題 Study abroad and its impact on the life course of a Japanese woman educator in the early 20th century: Sumi Oe and her study abroad in England
3 . 学会等名 History of Education Society 52th conference (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuri Uchiyama
2. 発表標題 'Kora Tomi (1896-1993) and traveling in transnational space in the 1920s and 1930s'
3. 学会等名 International Standing Conference for the History of Education 41th Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Setsuko Kagawa
2. 発表標題 For Truth and For the Nation: Education, Career and Networks of Early Women Scientists in Japan
3. 学会等名 History of Education Society UK Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Keiko Sasaki
2. 発表標題 The Dynamic Activities of Japanese Women for Obtaining Medical Doctor's Licences between the Meiji Restoration and World War 2
3. 学会等名 History of Education Society UK Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sayaka Nakagomi
2. 発表標題 Sumi Oe and Kasei Gakuin(School of Domestic Economy, Tokyo): Revisiting Japanese lifestyles in the first half of the twentieth century
3. 学会等名 History of Education Society UK Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuri Uchiyama
2. 発表標題 Tano Jodai and International Peace Movement
3. 学会等名 History of Education Society UK Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 広井多鶴子 久保貴子 荒井啓子 香川せつ子 志渡岡理恵 小山静子 加藤恭子 伊藤由希子 山崎明子 松田純子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 360
3. 書名 下田歌子と近代日本－良妻賢母論と女子教育の創出	

1. 著者名 S. Suzuki, G. McCulloch, M. Gu, P. V. Rao & J. Hong.(Eds.) Sayaka Nakagomi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 422
3. 書名 The Routledge encyclopedia of modern Asian educators 1850-2000.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 啓子 (Sasaki Keiko) (70406346)	電気通信大学・大学院情報理工学研究科・名誉教授 (12612)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	中込 さやか (Nakagomi Sayaka) (00778201)	立教大学・グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター・特任准教授 (32686)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	内山 由理 (Uchiyama Yuri)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 公開国際研究セミナー 「教育史におけるジェンダーとトランスナショナル」	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関